

**「映像学研究(1)」**  
**- 映画における歴史性と地域性 -**

**研究年度・期間**：平成7年度～平成8年度

**平成7年度**

**研究代表者**：山田 幸平  
(文芸学科 教授)

**研究ディレクター**：豊原 正智  
(芸術学部 助教授)

**共同研究者**：重政 隆文 武谷なおみ  
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)  
山田 兼士 吉岡 敏夫  
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)

**研究助言者**：上倉 庸敬  
(大阪大学 文学部 助教授)

**研究補助者**：池本 幸司  
(大学院 副手)

**平成8年度**

**研究代表者**：山田 幸平  
(文芸学科 教授)

**研究ディレクター**：豊原 正智  
(芸術学部 助教授)

**共同研究者**：重政 隆文 武谷なおみ  
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)  
山田 兼士 吉岡 敏夫  
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)

**研究助言者**：上倉 庸敬  
(大阪大学 文学部 助教授)

**研究補助者**：池本 幸司  
(大学院 副手)

**研究経過の概要**

本年度は2カ年研究計画の最終年度として研究成果のまとめの年であるが、前年度収集された文献及び作品の分析・整理を行いつつ、各分担領域での補足的な文献及び作品の収集が行われた。昨年度に引き続き日本映画史及び日本映画の監督に関する文献(いずれも佐藤忠男著)資料的な文献として日本映画の男優・女優の人名事典、また日本映画に関する批評等の文献が収集された。フランス映画に関しては、「カイエ・デュ・シネマ」の英語版、また、ジャン・コクトーに関する文献などが収集された。昨年度は作品の収集がほとんどできなかったが、今回旅費も計上され、意識的に作品収集が行われた。福岡市総合図書館での作品資料の調査及び東京でのイタリア映画関係の調査研究である。特にイタリアのネオ・リアリズム関係の作品(ロッセリーニ、デ・シーカ、フェリーニ)またピランデッロの戯曲集が8巻集められた。さらにはフランスのヌーヴェル・ヴァーグやハリウッドの作品等である。

各研究分担者はそれぞれの領域で、収集された文献及び作品の分析・整理をおこない、問題点を整理し研究会(5、6、7、8月)に臨んだ。10、11、1月の研究会では特に日本映画に関して研究助言者も交えて報告検討が行われた。そこでは、収集された東映のスクリプター、田中美佐江氏担当分の昭和22年から平成2年までの約190本、40人の監督作品のリストについて検討され、また代表的な作品について氏にインタビューを行った。さらに京都府京都文化博物館所蔵の日本映画についても調査研究および作品の鑑賞を行った。また同博物館で催された

「ニッポン・シネマ・クラシック」展（1997. 1. 11 - 2. 8）に於ける大正末から昭和初期に至る貴重な作品を鑑賞することができた。

## 研究成果について

本研究の目的は映画学体系化の試みとして次の2つの次元から多様な映画の統一的把握を行うことであった。すなわち、1) 時間的縦軸としての歴史性、2) 空間的横軸としての地域性、である。

先ず1)に関しては改めてG. サドゥールの文献を中心に、初期サイレント映画（第2次大戦前まで、前年度）以降の歴史について、特にアメリカ映画の台頭と商業的映画あるいは映画産業の成立の過程が明らかにされた。それは、20世紀初頭において既に全米で5000館が設立されていた映画館の展開とD.W. グリフィスによる『国民の創生』（1915）の成功以後設立される映画制作会社（グリフィス、アドルフ・ズーカーらのパラマウント社やチャップリンらのユナイテッド・アーティスト社など）の発展、そしてそこからのスターの誕生による。

一方、ヨーロッパではロシア革命以後のソ連映画の展開がたどられた。さらに1930年代のフランス映画の巨匠達の動きが改めて検証されるが、やはりアメリカ映画に対抗するヨーロッパの映画史は戦後イタリアのネオ・リアリズム及びフランスのヌーヴェル・ヴァーグである。この二つの戦後の動きについてはその性格からむしろ個別の作家の側からの分担研究が行われ、ヴィスコンティ論、ロッセリーニ論、ゴダール論としてまとめられつつある。それに関連してジャン・コクトーの映像論も議論され、映像のモチーフ、映画詩としての方法等について、分担者による一定のまとめがおこなわれた。

2) の地域性の問題は上にあるように作家論との関係で一部議論がまとめられた。日本映画に関しては、撮影所システム、スターシステム、映画会社の興隆の歴史、時代劇映画の問題、さらには戦後日本映画の世界的な評価などについて部分的に検討されたが、総体的なまとめには至っていない。日本映画については別に切り離れた研究態勢が必要である。

以上の研究成果の一部については、第22回教員研究会（平成10年1月16日）において、研究者全員によるシンポジウムという形で発表された。

## 研究の反省

歴史性と地域性という時間軸と空間軸を映画学研究に適用したが、比較的安定して資料収集と研究が可能であったのは時間軸としての歴史性であった。これはある程度当初から予想されていたが、困難であったのは、空間性とからむ歴史性である。つまり歴史的展開における他の国の映画史の影響については必ずしも十分な文献が集められなかった。また空間軸としての地域性は、作家論と密接に関連しており、研究分担者はある意味でその方面の専門家であり、その点では一定の成果があったのではないかと見いだすことであるが、そのことは同時に他の地

域性との比較検討をおのずから伴い、ここにも難しい問題をはらむことになった。今後の課題である。

既に述べたように、日本映画に関しては、あまりに身近であり、資料が豊かであり、さらに具体的な問題が数多くあるという点で、その課題毎に研究テーマを設定し、日本映画の総体的研究を改めて行う必要を感じた。

当初予定していた包括的な問題の発掘とそれらに対する一定の解決は必ずしも達成されなかった。また予算の都合上成果を形にして出せないが、改めて研究態勢を整えてこの映画学研究を続けることにしたい。